

タイトル

平成七福亭物語―気楽に笑っていただきます

作者 津島次温

登場人物

ポン太郎(43歳) 二つ目の女性噺家

師匠(67歳) ポン太郎の師匠

おかみさん(61歳) 師匠の奥さん

竹之丞(27歳) ポン太郎の妹弟子

とんび(44歳) ポン太郎の兄弟子

峰元(70歳) 初代熊五郎の戦友

ヤヨイ(64歳) 寄席の常連

葉月(40歳) ヤヨイの娘

初代熊五郎

居酒屋の客

ポン太郎「えー、今日も気楽に笑っていたかどうかと思うわけですが。私がこうして高座に上がりますと、初めの方はまあびっくりするわけです。「めくり」を見たら「七福亭ポン太郎」と書いてある。どんな奴が出てくるのかと思ったら、私が出てくるわけですから、「なんだい女じゃないか」とこうなるわけです。でも女だと思ってくれるお客さんはまだ良いんです。中にはね、私の顔をじいっと見てね。「へえ、ポン太郎さん？ずいぶんきれいに化けたねえ」なんて言う人もいるんですよ。違いますからね。正真正銘、女です。えー、「きれい」は正解ですけど」

竹之丞「ポン太姉さん、あいかわらず上手いなあ」

とんび「ケツ。寄席と土俵は男の仕事場だ。女が立つ所じゃねえってんだ」

竹之丞「まだそんなこと言ってる。兄さん、考えが古い

なあ。男女雇用機会均等法って、知らないんですか？

働く機会は男も女も差別無し」

とんび「なんだいそれは。小難しいことを言うな」

竹之丞「いい加減切り替えましようよ。もう昭和じゃな

いんだから。今は平成元年」

とんび「へえ、せいでやんすか」

竹之丞「なんですか、それ？ダジャレ？」

とんび「うるせいや」

竹之丞「あれ、とんび兄さん、どこへ行くんです？」

とんび「仕事は終わったんだ。酒だよ、酒」

竹之丞「あーあ」

SE 舞台の方から拍手が聞こえる

お囃子

竹之丞「おつかれさまです、ポン太姉さん」

ポン太郎「おつかれさまあ。今日のお客さんは私に合っ

てたみたい。枕から反応良かったわ」

竹之丞「最近、姉さんを目当てに来るお客さんも増えて

るみたいですよ」

ポン太郎「あら、そう？」

竹之丞「はなしは上手いし愛嬌も有る。おまけに美人と

くればお客も集まりますよ」

ポン太郎「竹ちゃん、あんたうまいこと言うわねえ」

竹之丞「お世辞じゃないですよ。私は本気で言ってるんです。若手の間じゃあ噂になってますよ。次の真打は

ポン太姉さんだって」

ポン太郎「えーっ。いやだ、もう」

竹之丞「真打ともなれば、名前ももつと華の有る名前に変えられるんじゃないですか」

ポン太郎「それはうれしいわね」

竹之丞「いつまでもポン太郎じゃないでしょう」

ポン太郎「ええ。まあ、ポン太郎もずっと名乗ってきた

から愛着は有るんだけどね」

竹之丞「ええっとお。師匠の名前が鶴松でしょう。鶴の

一字をもらって、『鶴千代』なんてどうです？」

ポン太郎「あら、竹ちゃん、良いじゃない」

竹之丞「七福亭鶴千代。良いじゃないですか」

ポン太郎「良いわねえ」

竹之丞「良いですよ」

ふたりで笑う。

S E マッチを擦る音

師匠「(煙草をふかす)」

ポン太郎「師匠。ポン太郎です」

師匠「おう、入んな」

ポン太郎「失礼します」

S E ふすまを開ける

ポン太郎「ウエツ。師匠、また昼間っから飲んでます？」

師匠「ああ？何か文句があんのかい」

ポン太郎「いえ、ご自由に」

S E ふすまを閉める

ポン太郎「おかみさんが何て言うかはしりませんが」

師匠「うるせいや。女房が怖くて酒が飲めるか」

ポン太郎「はあ、そうですか」

師匠「(たばこをふかし) そんなこたあどうでもいい。ポ

ン太郎、良い知らせだ。お前の真打昇進が決まったぞ」

ポン太郎「本当ですか」

師匠「ああ、春にはお披露目だ。しっかり勤めろよ」

ポン太郎「有り難うございます」

師匠「それでな、名前も変えろ」

ポン太郎「はい！真打ですから、今度は女らしい名前に」

師匠「熊五郎だ」

ポン太郎「え？」

師匠「お前の今度の名前は、七福亭熊五郎だ」

ポン太郎「熊五郎？」

師匠「ずっと前から決めてたんだ。お前が真打になると

きには、熊五郎を名乗らせるってな」

ポン太郎「あのお、師匠」

師匠「なんだい」

ポン太郎「そのお、御存知だと信じてますが、私、女で

す」

師匠「そんなこたあ知ってるよ」

ポン太郎「弟子入りしたときに頂いた名前が」

師匠「松子だ」

ポン太郎「そう、松子です。これは良かったんです。で

も前座のときが」

師匠「梅三だ」

ポン太郎「二つ目になって」

師匠「ポン太郎」

ポン太郎「そして今度は」

師匠「熊五郎だ」

ポン太郎「あのお、師匠」

師匠「なんだったんだ！」

ポン太郎「決して天狗になってるわけではないんですが、私、嘶家のなかではそれはそれは珍しい女の嘶家です。

まあ、美人ってわけでもないですが、そんなに悪くもないと思うんですよね」

師匠「だから、何が言いたいんだ」

ポン太郎「あのお、熊五郎って。もうちょっと華のある名前になりませんか？」

師匠「なんだとお！」

ポン太郎「たとえば、鶴千代とか」

師匠「バカヤロウ！熊五郎はな、この鶴松一門にとって大事な名前なんだ。先代は俺の兄弟子だ。その兄弟子のたつての頼みで、次は女に継がせるって決めたんだ

よ」

ポン太郎「なんで女に熊五郎なんです？」

師匠「うるせえ！ツベコベ言うな」

ポン太郎「そんなあ」

師匠「それからな、昇進披露の題目も決めてある。『権助

提灯』だ」

ポン太郎「権助提灯」

師匠「先代熊五郎の得意芸だ。しっかり稽古しとけよ」

ポン太郎「稽古って、私、まだ教わってないですよ、権

助提灯」

師匠「そりゃあそうだ。俺はやらねえからな」

ポン太郎「そんなあ、無茶苦茶ですよ」

師匠「うるせえ。熊五郎は権助ができなけりゃあ駄目だ」

ポン太郎「ええーっ」

SE 鍋がグツグツ音を立てる。

包丁がまな板を叩く音。

ポン太郎「おかみさん」

おかみさん「あら、ポンちゃん。どうしたの？浮かない

顔して」

ポン太郎「今、師匠に呼ばれて」

おかみさん「ああ。真打昇進のこと、聞いたのね。おめ

でとう。良かったじゃない。私はね、もっと早くから

師匠に言ってたのよ。ポンちゃんは真打の器だって」

ポン太郎「(黙っている)」

おかみさん「あれ、どうしたの。うれしくないの？」

ポン太郎「真打に上がったら改名しろって言われたんで

す。熊五郎に」

おかみさん「ああ、そのこと」

ポン太郎「ひどいと思いません。熊五郎ですよ、熊五郎。

いくら噺家は男の世界だって言ったって、私は女なん

だから」

おかみさん「その名前の事、師匠は説明してくれなかつ

たの？」

ポン太郎「師匠の兄弟子の名前だって言っていました。次

は女に継がせると決めてたって」

おかみさん「それだけ？」

ポン太郎「それだけ」

おかみさん「まったく、ぶっきらぼうにも程があるわよ

ねえ」

ポン太郎「おかみさんは知ってるんですか？先代の熊五郎」

おかみさん「もちろんよ」

ポン太郎「どんな人なんですか？」

おかみさん「師匠より五つくらい年上だったかな。格好

良かったわよ。勉強熱心だって、私のお父ちゃんが随

分気に入ってたのよ」

ポン太郎「おかみさんのお父さんって、先代の？」

おかみさん「そう、先代の七福亭鶴松。熊五郎さんが居

た頃は、私はまだ子供だったのよ。でも、熊五郎さん

は噺家にしとくのはもったいないようなハンサムだっ

たし、声もよくてね。私、お父ちゃんに言ったのよ。

大きくなったら熊五郎さんのお嫁さんになるって。そ

れがねえ、あんな酔っ払いの面倒を見ることになる

はねえ」

ポン太郎「その熊五郎さんは、今はどうしてるんです？」

おかみさん「……もういないの」

ポン太郎「え？」

おかみさん「戦争の時に、戦地で亡くなったの」

ポン太郎「戦争で」

師匠（別の部屋から）「おーい、花あ！どこだい」

おかみさん「はあい！師匠が呼んでるわ。ポンちゃん、  
ちよっとお鍋見ててくれる」

ポン太郎「え、あ、はい」

おかみさん「（台所を出ようとしながら）あ、そうだ。

後で葉月ちゃんのお店に行ってみたら。ヤヨイさんに

熊五郎さんのこと聞いてみるといいわ」

ポン太郎「ヤヨイさんに？」

おかみさん「ヤヨイさんね。熊五郎さんの大ファンだっ

たの」

師匠（別の部屋から）「花あ！」

おかみさん「はあい！今行きます！それじゃポンちゃん、  
鍋、お願いね」

ポン太郎「あ、おかみさん。……戦死したの？熊五郎さ  
んって」